

近隣分棟型の社会福祉施設の空間特性が障害者と健常者の交流と障害理解に及ぼす影響 その1
—各空間における交流と施設利用者の障害理解の実態—

共生社会 地域福祉 交流空間
障害者観 地域交流 視覚的交流

準会員 ○黒山真樹* 正会員 森豪大*****
正会員 梶田美結** 正会員 重山隼人*****
正会員 藪谷祐介*** 正会員 安倍ひより*****
正会員 北島陽貴****

1. 研究背景・目的

障害者等が積極的に参加・貢献していくことができる共生社会¹⁾の実現には、障害者と健常者の地域交流が重要とされている一方で、両者の地域交流は十分に定着していない。交流が日常的に行われていないこと、社会福祉施設(以下、施設)が地域に対し閉鎖的であることは、障害者に対する偏見を強める原因になると考える。

そこで本研究では、障害者と健常者の日常的な地域交流や、地域に対して開かれた施設運営が行われている「輪島 KABULET」(以下、当施設)を研究対象とした。当施設の I.空間特性が、II.障害者と健常者の交流にどのような影響を与え、どのように健常者のIII.障害理解を高めたのかを明らかにするため、地域住民を対象にアンケート調査を実施した。

なお、本研究は2編で構成され、本編では調査概要を示し回答結果の単純集計を整理する。

2. 研究方法

2-1. 研究対象

本研究では輪島KABULET全体の中核エリア(図1)を担う輪島KABULET活動拠点(以下、活動拠点)、ゴッチャ・ウェルネス、カフェ・カブーレの3施設を研究対象とした(図2)。活動拠点は、食事や休憩ができるやぶかぶれや、地域住民が無料で利用できるお風呂を併設しているため、地域住民が集う施設になっている。本調査では、中核エリアを担う3つの施設の位置関係を「近隣分棟型」と定義した。道路を挟み近隣の複数敷地に3施設が分棟することで各施設が道路に対してテラスを設けたり開口部を設けた

りするため、屋内とテラス、道路とテラスなどの別空間同士のつながりを生み出している。

2-2. 調査内容

はじめに、I.空間特性について、当施設内の各空間と施設の外部空間を含む内外に繋がりのある空間を列挙した。次にそれを基に、II.障害者と健常者の交流について、列挙した各空間における地域住民と障害者間の交流を調査した。本研究では、障害者と健常者間の交流を、言葉による対話を伴わない視覚的交流と言葉による対話を伴う対話的交流の2種類に設定した。さらに、III.障害理解について、河内²⁾と生川³⁾の調査を参考に調査項目を作成し、回答者が障害者全般に対しどのような感情を持っているかを測定した。調査項目は表1に示す。

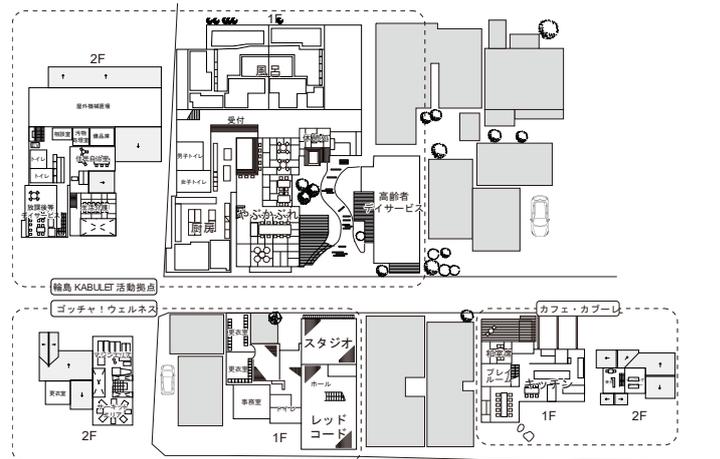


図2：輪島 KABULET 中核エリア配置図

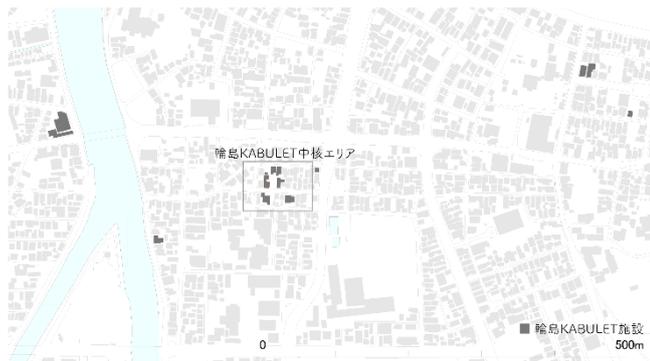


図1：調査範囲

表1：アンケート調査概要

調査方法	アンケート調査
調査期間	2023年8月17日(木)～9月1日(金)
調査対象者	輪島 KABULET 中核エリアから半径200m圏内に居住している地域住民
配布数	264件
回収数	回収数：100件 / 有効回答数：76件 (有効回答率：28.8%)
調査項目	①属性(年齢/性別/居住地区/輪島 KABULET 以外での障がい者との接触経験) ②輪島 KABULET の利用状況(利用頻度/利用し始めた時期/利用目的) ③障害理解(12項目) ④輪島 KABULET の運営形態に関する知識(2項目) ⑤交流量・内容(24項目)

3. 単純集計結果

アンケート回答結果の傾向を明らかにするため単純集計を行った。近隣分棟型の3施設の内、活動拠点を除く2施設は利用者が非常に少なかったため、施設の利用状況に関する設問は、活動拠点に限定し分析を行った。

3-1. 施設利用の状況について

アンケートの単純集計結果から、利用頻度はばらつきがあり、利用時期は早期から利用している人が多いことが明らかとなった。また多くの住民がお風呂を目的に活動拠点を利用していることが明らかとなった。

3-2. 障害理解

回答者の障害理解を測定する質問項目について、5件法を数値に換算し全回答者の平均値を算出した(図3)。障害者の労働環境(項目6・8)や地域環境(項目7)についての項目の値が高かったことから、障害者が地域で生活基盤を築くことや障害者の労働環境について理解を持っている人が多いことが明らかになった。一方で、施設利用者にとって障害者と共同作業をする場面を想起する際に抵抗を感じることも明らかとなった(項目10・11)。

3-3. 交流内容・量

視覚的交流と対話的交流の各交流において、当施設の建物内の同空間での交流量と複数空間を横断する交流量の平均値を算出した。図4は交流の量を円の大きさで矢印の太さで示した図である。当施設のいずれの空間においても視覚的交流が対話的交流の平均値を上回っていた。また、活動拠点やテラスを介した交流量が高いことから、当施設において障害者と健常者との交流量が多い場所は、屋内では活動拠点、屋外ではテラスであることが明らかとなった。

当施設を利用する人の主な利用目的はお風呂である一方で、視覚的・対話的交流量はともにやぶかぶれで最も多いことが明らかとなった。やぶかぶれは施設利用者が食事や休憩することができる滞留空間であると同時に、障害者の就労の場ともなっているため障害者の姿が目に入りやすい空間である。またやぶかぶれは入り口からお風呂に繋がる動線上にある。ここから、地域住民の主な利用目的となる機能に繋がる動線上に、障害者の就労の場や食事や休憩ができる場などの視覚的交流を創出する空間を設置することが、障害者と健常者の交流を創出する際に重要であることが推察できる。

また屋外空間では、テラスのような設えを介して視覚的交流が行われていることから、テラスが屋内と屋外のインターフェイスとして機能し視覚的交流を創出する役割を果たしていることが推察できる。

4. まとめ

本編では、社会福祉施設における地域住民との地域交流を意図して設置された輪島 KABULET を対象にⅠ.空間特性とⅡ.障害者と健常者の交流、健常者のⅢ.障害理解をアンケート結果から明らかにした。次編では、各回答結果を類型化しそれぞれの特性や関係を整理することで、Ⅰ.空間特性とⅡ.交流、Ⅲ.障害理解の関係を明らかにする。

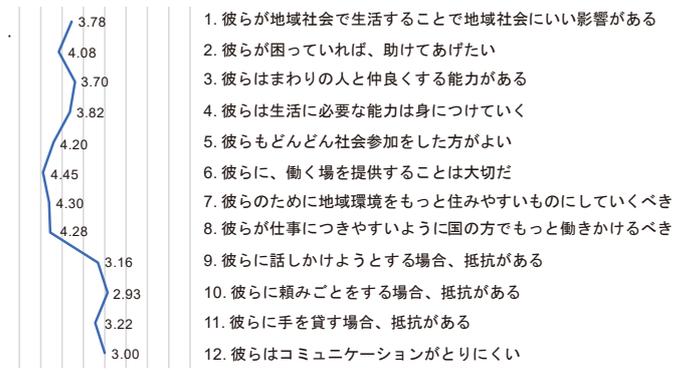


図3：障害理解における回答者の平均値

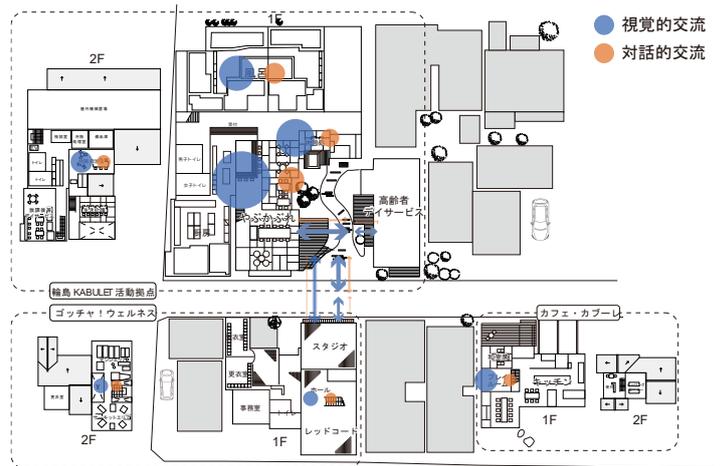


図4：視覚的交流と対話的交流の比較図

参考文献

- 1) 文部科学省:(2012)共生社会の形成に向けて(2024年3月26日最終閲覧 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm)
- 2) 河内清彦:障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響. 教育心理学研究, 52(4), pp437-447, 2004
- 3) 生川善雄:精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究: 態度と接触経験、性、知識との関係. 特殊教育研究, 32(4), pp11-19, 1995

* 富山大学芸術文化学部 学部生
 ** バウハウス丸栄
 *** 富山大学学術研究部芸術文化学系 講師
 **** 五井建築研究所
 *****富山大学人文社会芸術総合研究科 大学院生

* Undergraduate, School of Art and Design, Toyama Univ.
 ** Bauhaus Maruei.
 *** Lecturer, Faculty of Art and Design, University of Toyama.
 **** GOI Architecture & Associates.
 ***** Graduate, Faculty of Humanities and Social Sciences, Toyama Univ.